

令和5年度 シラバス

科目名	理学療法管理学 (30)時間	前後期	第 I 学科3学年	講師	山中 克也
実務経験	理学療法士として17年以上の実務経験あり				
到達目標	理学療法士としての知識や技術を患者に提供する際に必要な、マネジメント能力を身につける				
履修上の注意	不明な点は遠慮なく質問する				
成績評価方法	学科試験(100%) 出席状況も加味します				
教科書	15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 理学療法管理学(中山書店)				
参考書					

回数	項目	授業内容
第1回目	総論	理学療法管理学の源流
第2回目	病院の分類と組織	「医療法」における医療と医療圏、医療機関
第3回目	専門職とチームケア	チームケアの必要性とその背景
第4回目	社会保障のしくみ	社会保障の構成要素とその役割
第5回目	医療保険制度	医療保険制度の歴史
第6回目	介護保険制度	介護保険制度の特徴
第7回目	診療・介護報酬と収益構造	医療・リハビリテーションの値段
第8回目	保健・医療・介護・福祉の連携	保健・医療・介護・福祉の連携の概要
第9回目	業務管理	理学療法士の業務の流れ
第10回目	情報管理	理学療法の業務に必要な情報と診療記録の分類
第11回目	リスク管理	医療、介護におけるコンプライアンス
第12回目	感染症管理	感染と感染症
第13回目	権利擁護と職業倫理	インフォームド・コンセント
第14回目	教育管理	臨床実習の管理
第15回目	理学療法士の政治・政策への関与	理学療法士が政治に関与しなければならない理由
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	理学療法学総合演習Ⅱ (30)時間	前期	第Ⅰ学科3学年	講師	山中 克也
実務経験	理学療法士として17年以上の実務経験あり				
到達目標	理学療法プロセスの内容(実技、評価、動作指導)を理解する				
履修上の注意	主体的に参加すること				
成績評価方法	実技試験、授業態度、筆記試験などを総合的に判定する				
教科書	配布資料にて実施する				
参考書					

回数	項目	授業内容
第1回目	理学療法プロセス	理学療法プロセスの確認 OSCEテストの説明
第2回目	実技演習①	ROM実技演習と復習
第3回目	実技演習②	MMT実技演習と復習
第4回目	実技演習③	移乗等介助の実技演習
第5回目	実技演習④	筋・骨の触診実技演習
第6回目	実技演習⑤	感覚検査・反射検査実技演習
第7回目	実技演習⑥	失調検査 立位バランス検査実技演習
第8回目	実技演習⑦	杖などの指導実技演習
第9回目	実技演習⑧	脳卒中麻痺側運動機能評価/脳神経検査 実技演習と復習
第10回目	実技演習⑨	バイタル測定の実技と復習
第11回目	実技演習⑩	車いす駆動(ギャッジアップなど)の指導、実技演習
第12回目	実技演習⑪	グループ内で情報収集・検査測定①
第13回目	実技演習⑫	統合と解釈・問題点抽出・ゴール設定
第14回目	実技演習⑬	問題点の検証と治療プログラムの立案
第15回目	実技演習⑭	最終評価と考察について
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	国家試験対策総合演習 (120)時間	後期	第I学科3学年	講師	山中 克也 (オムニバス)
実務経験	山中 克也:理学療法士として17年以上の実務経験あり 森垣 浩一:理学療法士として19年以上の実務経験あり 金島 理恵:理学療法士として15年以上の実務経験あり 久保けい子:理学療法士として13年以上の実務経験あり 橋本 貴之:理学療法士として14年以上の実務経験あり 丹野 晴臣:理学療法士として7年以上の実務経験あり 谷 裕武:理学療法士として15年以上の実務経験あり 吉田 峻 :理学療法士として14年以上の実務経験あり 安田 美紀:理学療法士として11年以上の実務経験あり 久常 昌美:理学療法士として8年以上の実務経験あり				
到達目標	3年次までに学習した全内容を踏まえて、国家試験合格を目指す				
履修上の注意	全教員がオムニバス形式でそれぞれの専門分野を担当します。欠席しないように注意すること。				
成績評価方法	理学療法士国家試験と同じ形式の問題200問 原則60%以上で認定とする				
教科書	理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント4冊(医歯薬出版) 配布した過去問10年分				
参考書	各自国試対策にて準備している参考書				

回数	項目	授業内容
第1・2回目	基礎医学分野 ①	解剖生理学 ①
第3・4回目	基礎医学分野 ②	解剖生理学 ②
第5・6回目	基礎医学分野 ③	解剖生理学 ③
第7・8回目	基礎医学分野 ④	解剖生理学 ④
第9・10回目	基礎医学分野 ⑤	運動学 ①
第11・12回目	基礎医学分野 ⑥	運動学 ②
第13・14回目	基礎医学分野 ⑦	人間発達学
第15・16回目	臨床医学分野 ①	病理学

第17・18回目	臨床医学分野 ②	内科学
第19・20回目	臨床医学分野 ③	骨関節障害と臨床医学
第21・22回目	臨床医学分野 ④	中枢神経・末梢神経・筋の障害と臨床医学
第23・24回目	臨床医学分野 ⑤	精神障害と臨床医学
第25・26回目	臨床医学分野 ⑥	臨床心理学
第27・28回目	臨床医学分野 ⑦	小児・老年期障害と臨床医学、リハビリテーション医学・概論
第29・30回目	基礎理学療法学分野 ①	基礎理学療法学 ①
第31・32回目	基礎理学療法学分野 ②	理学療法評価学 ①
第33・34回目	基礎理学療法学分野 ③	理学療法評価学 ②
第35・36回目	基礎理学療法学分野 ④	理学療法評価学 ③
第37・38回目	基礎理学療法学分野 ⑤	理学療法治療学 ①
第39・40回目	基礎理学療法学分野 ⑥	理学療法治療学 ②
第41・42回目	基礎理学療法学分野 ⑦	理学療法治療学 ③
第43・44回目	基礎理学療法学分野 ⑧	地域理学療法学
第45・46回目	傷害別理学療法治療学分野 ①	骨関節障害 ①
第47・48回目	傷害別理学療法治療学分野 ②	骨関節障害 ②
第49・50回目	傷害別理学療法治療学分野 ③	中枢神経障害 ①
第51・52回目	傷害別理学療法治療学分野 ④	中枢神経障害 ②
第53・54回目	傷害別理学療法治療学分野 ⑤	末梢神経・筋障害
第55・56回目	傷害別理学療法治療学分野 ⑥	呼吸・循環・代謝障害
第57・58回目	傷害別理学療法治療学分野 ⑦	運動・発達障害
第59・60回目	傷害別理学療法治療学分野 ⑧	その他障害(熱傷、がん、有痛性疾患、廃用症候群)
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	理学療法学研究論 (60)時間	前後期	第I学科3学年	講師	森垣 浩一
実務経験	理学療法士として19年以上の臨床経験あり				
到達目標	理学療法における研究の意義や方法を理解する				
履修上の注意	予習復習に努めること。				
成績評価方法	小テスト・定期試験				
教科書	配布資料				
参考書					

回数	項目	授業内容
第1・2回目	各論 ①	統計学の基礎
第3・4回目	各論 ②	データの尺度・特性値・グラフ
第5・6回目	各論 ③	推定と検定の基礎
第7・8回目	各論 ④	2標本の差の検定
第9・10回目	各論 ⑤	1標本の差の検定
第11・12回目	各論 ⑥	差の検定
第13・14回目	各論 ⑦	相関
第15・16回目	各論 ⑧	回帰分析
第17・18回目	各論 ⑨	重回帰分析
第19・20回目	各論 ⑩	分割表の検定
第21・22回目	各論 ⑪	一元配置分散分析
第23・24回目	各論 ⑫	反復測定分散分析
第25・26回目	各論 ⑬	信頼性係数
第27・28回目	各論 ⑭	多重ロジスティック回帰分析
第29・30回目	各論 ⑮	診断の指標
備考		

令和5年度 シラバス

科目名	臨床総合実習 I (315)時間	前期	第 I 学科3学年	講 師	専任教員 臨床実習指導者
到達目標	1. 臨床評価実習の目標に加え、下記を満たせる様に努力する。 2. 指導を受けながら、障害構造から問題点を列挙し、優先順位をつける。 3. 挙げられた問題に対して対応の要点等を記述し、プログラム立案の助言を受ける。 4. 可能であれば指導を受けながら安全に運動療法等に介入(運動強度、頻度、観察など)を行う。				
履修上の注意	各実習施設に応じて準備すること。				
成績評価方法	実習前評価[OSCE](20%)、実習施設評価(60%)、実習後評価[実習報告会](20%)				
教科書	特になし				
参考書	購入したすべての教科書				

講義計画・講義内容	
1. 実習は臨床実習施設において7週間行われる。 2. 内容は、各施設における実習指導者の指導・監督の下、実際の症例に対して理学療法評価(情報収集・記録・統合と解釈)を行い、治療計画を立案・実施する。 3. これまでの授業で学んだ知識や技術を総動員し、実際の臨床現場での様々な症例に対して理解を深める。 4. 学内においては実習前に実習前実技試験、実習終了後に実習報告会(発表)を行う。	
臨床総合実習 I は、これまでに受けた教育の総括的な修練の場と位置づけることができる。この総合的な臨床実習は、評価、測定、治療、プログラムの作成までを考え、さらに臨床実習指導者の指導・監督の下で、治療の一部を実施し、その適否や有効性について考察できる能力を養う。	
備考	

令和5年度 シラバス

科目名	臨床総合実習Ⅱ (315)時間	後期	第Ⅰ学科3学年	講 師	専任教員 臨床実習指導者
到達目標	1. 以下の総合臨床実習Ⅰの目標が、可能な限り複数の症例に対して行えることを目標とする。 2. 指導を受けながら、症例の障害構造から問題点を列挙し、優先順位をつける。 3. 挙げられた問題に対して対応の要点等を記述し、プログラム立案の助言を受ける。 4. 可能であれば、指導を受けながら安全に運動療法等に参加的介入を行う。				
履修上の注意	各実習施設に応じて準備すること。				
成績評価方法	実習前評価[OSCE](20%)、実習施設評価(60%)、実習後評価[実習報告会](20%)				
教科書	特になし				
参考書	購入したすべての教科書				

講義計画・講義内容

1. 実習は臨床実習施設において7週間行われる。
2. 内容は、各施設における実習指導者の指導・監督の下、可能な範囲で複数の症例に対して理学療法評価(情報収集・記録・統合と解釈)を行い、治療計画を立案・実施する。
3. これまでの授業や実習で学んだ知識や技術を総動員し、臨床現場での様々な症例に対して理解を深める。
4. 学内においては実習前に実習前実技試験、実習終了後に実習報告会(発表)を行う。

臨床総合実習Ⅱでは、臨床実習指導者の指導・監督のもと、臨床総合実習Ⅰで修得した技術を基にプログラムを作成し、治療を実施することによって、臨床現場に必要な基礎能力を養い、その適否や有効性について考察できる能力を修得する。臨床総合実習Ⅰよりもさらに学びを深め、評価から治療までの系統的な理学療法を構築できる能力を養う。

備考